

2015

# 地歴最新資料

第17号 (2015年4月25日現在)

## INDEX

2014年5月～2015年4月のおもなできごと・TOPIC! …………… 2

世界史

特集 世界史教科書の記述を考える

～西ヨーロッパ世界の形成をめぐって～ …… 3

福島高等予備校講師 久保田 慎一

日本史

特集 近世大坂の教育と学問 …………… 5

元大阪府立高等学校教諭 高橋 昌弘

(第一学習社 『高等学校 日本史A』教科書 著者)

地理

特集 フランスのリセを見学して …………… 9

東京都立国分寺高等学校 指導教諭 柴田 祥彦

(第一学習社 『高等学校 地理A』教科書 著者)



第一学習社

# 2014年5月～2015年4月のおもなできごと

(注) 敬称略。○内の数字は月を示す。

政治	社会・文化	国際情勢
<p><b>2014年</b></p> <p>⑤30日、国家公務員の人事管理に関する戦略的中枢機能を担う組織として内閣人事局が発足。</p> <p>⑥13日、憲法改正の際の国民投票の年齢を、現在の20歳以上から18歳以上に引き下げるなどを定めた国民投票法の改正法が成立。</p> <p>⑦1日、臨時閣議において、集团的自衛権の限定的な行使を可能にする決定。</p> <p>⑧1日、政府は領海の範囲を決める基準点となる離島158島の名称を決定。</p> <p>⑩10日、安倍首相と中国の習近平国家主席との間で、約2年半ぶりとなる日中首脳会談が開催。</p> <p>⑩20日、下村文科相は、日本史必修化など高校の地理・歴史教育の見直しを含む学習指導要領の全面改訂を、中央教育審議会に諮問。</p> <p>⑩10日、特定秘密保護法施行。</p> <p>⑩14日、衆議院の解散総選挙で与党が大勝。24日、第3次安倍内閣発足。</p> <p><b>2015年</b></p> <p>②10日、政府は政府開発援助(ODA)大綱の改定を閣議決定。「国益の確保」を重視するとの表現を初めて明記。</p> <p>④22日、グルジアの国名の呼称を英語表記に基づく「ジョージア」に変更することを盛り込んだ改正法が施行。</p>	<p><b>2014年</b></p> <p>⑤25日、サッカーの女子アジアカップで、「なでしこジャパン」が初優勝。</p> <p>⑥21日、「富岡製糸場と絹産業遺産群」(群馬県)が世界文化遺産に登録。</p> <p>⑧20日、広島市で局地的な豪雨により大規模な土砂災害が発生。</p> <p>⑨12日、理化学研究所などの研究チームが、iPS細胞(人工多能性幹細胞)を用いた世界初の移植手術に成功。</p> <p>⑨27日、長野県と岐阜県の県境に位置する御嶽山が噴火。</p> <p>⑩7日、青色発光ダイオード(LED)を開発した赤崎勇・天野浩・中村修二へのノーベル物理学賞授与が発表。10日、女子教育の権利を訴えるマララ=ユスフザイラへの平和賞授与が発表。</p> <p>⑩26日、和紙が無形文化遺産に登録。</p> <p>⑫3日、小惑星探査機「はやぶさ2」が打ち上げに成功。</p> <p>⑫26日、理化学研究所の調査委員会は「STAP細胞は別の万能細胞」とする最終報告を発表。</p> <p><b>2015年</b></p> <p>①15日、奈良県立橿原考古学研究所が、奈良県明日香村の小山田遺跡で7世紀中頃の巨大な方墳の一部を発見したと発表。舒明天皇の墓との説も。</p> <p>③14日、北陸新幹線が開業。</p>	<p><b>2014年</b></p> <p>⑤16日、インドで行われた総選挙で、野党の人党が圧勝。26日、人党のモディが首相に就任し、10年ぶりに政権が交代。</p> <p>⑤22日、タイのプラユット陸軍司令官がクーデタを宣言。8月25日、首相に就任。</p> <p>⑥29日、過激派組織「イスラーム国」がイラクとシリアにまたがる地域に国家樹立宣言。</p> <p>⑦17日、ウクライナ東部を飛行中のマレーシア航空の旅客機がミサイルによって撃墜。</p> <p>⑧8日、西アフリカ諸国でのエボラ出血熱の感染拡大について、世界保健機関(WHO)が緊急事態を宣言。</p> <p>⑨18日、スコットランドでイギリスからの分離・独立の是非を問う住民投票が実施。反対多数により否決。</p> <p>⑨26日、行政長官選挙の民主化をめぐり、香港で反政府デモが発生。</p> <p><b>2015年</b></p> <p>①1日、エストニアがユーロ加盟。ユーロ導入国は19か国に。</p> <p>①7日、預言者ムハンマドの風刺を行ったフランスの新聞社シャルリー=エブド社が銃撃を受け、12人が死亡。</p> <p>①20日、「イスラーム国」が日本人2人を人質に。</p> <p>④12日、アメリカとキューバは、1961年の国交断絶以来初の首脳会談をパナマで開催。</p> <p>④15日、中国が設立を提唱するアジアインフラ投資銀行(AIIB)の創設57か国が決定。</p>

## TOPIC!

### ●ヴァイツゼッカー元ドイツ大統領死去 世界史

ドイツ連邦共和国のリヒャルト=フォン=ヴァイツゼッカー元大統領(1920～2015、在任1984～94)が1月31日、94歳で死去した。2月11日には、ベルリン大聖堂において政府主催の追悼式典が開催された。ヴァイツゼッカーは、大統領在任中(当時は西ドイツ)、ドイツ敗戦40周年にあたる1985年5月8日、ドイツ連邦議会での演説で、「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも目を閉ざすことになる」と訴えた。過去を直視した政治指導者の発言として世界の注目を集めた。

### ●文化財をめぐる動き 日本史

2014年、世界初のレンズ付きフィルム「写ルンです」(1986年発売)が国立科学博物館の未来技術遺産に、国産初の腕時計(1960年発売)が日本機械学会の機械遺産に登録された。近年、こうした技術やモノを「遺産」として認定する動きが活発である。文化庁は、2015年度から「日本遺産」の認定を始めた。「地域に点在する有形・無形の文化財をパッケージ化し、我が国の文化・伝統を語るストーリー」を認定するもので、その第1弾として、足利学校跡(栃木県)など、栃木・茨城・岡山・大分4県の旧教育施設で構成する「近世日本の教育遺産群」など、24府県、18件が選ばれた。

### ●第7回世界水フォーラム開催 地理

2015年4月12日～17日、韓国の大邱市と慶尚北道を会場に第7回世界水フォーラムが開催された。世界水フォーラムは、地球上の水問題に関する国際会議で1997年から3年に1度開催されており、2003年には琵琶湖・淀川流域(京都・滋賀・大阪)で開催された。各国首脳や地方自治体の首長、水関連企業の代表など、約160か国・地域の約25,000人が出席し、水の安全保障や持続可能性、実現可能な履行メカニズムの構築などが議論され、「大邱・慶北実行宣言」が採択された。

## はじめに

よりよい世界史教科書が求められている。ただ、今までは、教育現場から教科書記述への要望を出すことは、あまりなかったかも知れない。私たちは、全体の構成や図版、レイアウトなどで各社の教科書を比較しながらも、本文や注の内容については、執筆する研究者、教科書会社の編集者、文部科学省の検定官にほぼまかせていたと思う。

現場で教科書記述があまり検討されてこなかった背景には、授業における教科書の使われ方もあったと思われる。教師の考え方によっては、教科書が参考程度にしか扱われない場合もあったのである。しかし、「テキストを読んで理解する」ことは、世界史においても大切な学習プロセスである。この学習プロセスを重視すれば、教科書の記述が生徒たちの歴史理解に少なからぬ影響を与えることを考慮せねばならなくなるだろう。この点からも、現場におけるていねいな比較・検討が欠かせないのである。

教科書の記述に謙虚に向き合うことは、教える側にとってもプラスである。複数の教科書の比較・検討は、授業の改善につながるだろう。記述のわずかな違いが歴史の見方の違いであることにも気づくようになるだろう。

本稿では、「西ヨーロッパ世界の形成」をテーマに、4つの視点から、世界史B教科書の記述を検討する。また、一部記述の改善も提案したいと思う。(世界史Aの教科書にも若干触れたい。)

## 1. ゲルマン人の大移動

ゲルマン人の大移動の教科書における位置づけは、大きく次の2つに分かれる。

- ①中世ヨーロッパ史の最初に位置づける。
- ②ローマ帝国史の最後に位置づける。

①の位置づけをとる教科書のほうがやや多いが、①と②の相違は小さいものではない。中世の始まりをいつとするかという問題に関わるからである。イギリスの歴史学者ピーター＝ブラウンが5～8世紀を「古代末期」とする見方を出して以降、「西ローマ帝国滅亡」の5世紀後半を中世の始まりとする従来の考え方は、再検討を迫られてきた。「古代末期」あるいは「中世への長い過渡期」という時期を考える場合、①のような位置づけはあまり適切ではないということになる。

①の位置づけをとる教科書を使う場合も、私たちは、4世紀後半からのゲルマン人の移動を、ローマ史の中にきちんと位置づけなければならない。また、ゲルマン人の諸国家の多くが西ローマ帝国の消滅の前にできたことを、見逃さないようにしたい。西ローマ帝国の領域にゲルマン人の新国家が次々とできたために、西ローマ皇帝はオドアケルの退位要求をのまざるをえなかったのだ。これ以降、

ローマの遺産とゲルマンの諸制度・文化がせめぎ合いながら混交する過渡期が続いたのである。

## 2. カールの戴冠

「中世への長い過渡期」という考え方も関連するが、中世西ヨーロッパ世界が明瞭にその姿を現すのは11世紀とされている。その場合、カールの戴冠(800年)の位置づけは微妙なものとなるのだが、このことに注意が払われていない教科書もある。カールの戴冠についての教科書の記述は、次の2つに大別されるであろう。

- ①ローマ以来の古典古代文化・キリスト教・ゲルマン人が融合して西ヨーロッパ中世世界が誕生したことを述べ、その歴史的意義を強調する。
- ②カール大帝の時代に西ヨーロッパ世界の基礎ができたことは述べながらも、在地豪族に依拠した統治体制と大帝死後の王国分裂を重視する。

①は従来からの典型的な記述であるが、11世紀を中世の画期とする見方との違いや関連は明確にされていない。後述するように、カール大帝の時代には、キリスト教はまだヨーロッパ全域に広まっていない。ローマ＝カトリック教会とギリシア正教会への分裂も起きてはいない。また、民族移動の波はまだ終息しておらず、封建制の成立は2世紀以上も後のことである。これらを考え合わせると、①のような見方による授業には慎重でなければならないだろう。

## 3. ヨーロッパのキリスト教化

「ヨーロッパのキリスト教化」という表現に違和感を感じる方もいるかも知れない。生徒たちの場合は、なおさらである。それは、私たちの常識の中で、すでにヨーロッパとキリスト教が一体となっているからである。しかし、地中海地域の宗教であったキリスト教が、ヨーロッパ全域に広まっていく過程を知ることこそ、ヨーロッパ理解の鍵があると言っていい。

「ヨーロッパのキリスト教化」をあまり強調せずに、授業を進める場合もあるかも知れない。そうすると、「クローヴィスの改宗」や教皇グレゴリウス1世の布教、修道院運動などの歴史的意義を、生徒たちがよく理解できないことになってしまうだろう。また、人々の生活へのキリスト教の浸透の経過も、キリスト教以前からの信仰が根強く残ったことも、理解が難しくなるだろう。

「ヨーロッパのキリスト教化」には、長い年月を必要とした。特にかつてのゲルマニアには、ゆっくりと広がっていった。たとえば、北ドイツのプレーメンに教区がおかれたのは8世紀末のことである(カールの戴冠の少し前である)。したがって、デンマーク以北にキリスト教(ローマ＝カトリック)が広まったのは、カールの戴冠のずっと後である。スカンディナヴィア半島にキリスト教が定着したの

は、11世紀のことだと言われる。当然のことながら、土着の信仰とキリスト教は、長い間共存していた。このような歴史から、ゲルマン人の樹木信仰がクリスマス・ツリーに姿を変えたことも理解できるようになる。

また、非常に重要なことであるが、10～11世紀はマジヤール人や西スラヴ人にローマ=カトリックが広まった時期でもある。そして同じ頃、キエフ公国がギリシア正教を受け入れたのであった。

「ヨーロッパのキリスト教化」を明快に記述している教科書は、残念ながら少ない。「北方へ広がるキリスト教」という視点を明確に出している教科書もあるが、「ローマ=カトリック教会の発展」の中でゲルマン人への布教に触れるという教科書が多い。後者のような記述では、ローマ=カトリックがどのように北ヨーロッパや中央ヨーロッパにまで広まったのかは、明らかにされないままである。地図を掲載するなどの工夫もしながら、ローマ=カトリック圏とギリシア正教圏の拡大のプロセスを理解できるようにすべきであろう。なお、レコンキスタは、イベリア半島の「再キリスト教化」と捉えることができる。

世界史Aでは、第一学習社の教科書がよく工夫されている（「キリスト教の社会・文化」）。図版を豊富に使いながら、中世の人々の日常生活の中でキリスト教をとらえているが、こうした視点は世界史B教科書にも必要である。リード文は、簡潔な中にも大切な内容を含めていて、教科書記述としては模範的なものだと思う。巡礼地としてサンチアゴ=デ=コンポステーラも紹介されており、世界史Aの教科書としては十分な内容であろう。（第一学習社版の世界史Aは、近現代を含め、文化史をきちんと位置づけている点に特色がある。）

#### 4. ラテン=キリスト教世界

「ラテン=キリスト教世界」とは、ローマ=カトリック圏のことである。今のところ、この語は高校の教科書では使用されていない。しかし、次の2つの理由から、今後は教科書に記述すべき語であると考えられる。

- ①すでに中世ヨーロッパ史の概説書で使用されている。
  - ②この語を使用することで、中世西ヨーロッパ世界を理解しやすくなる。
- ①についてであるが、中世ヨーロッパ史の泰斗ジャック・ル=ゴフも、使用している（たとえば『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』[菅沼潤訳、藤原書店]）。また、日本語の新しい概説書『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』[堀越宏一・甚野尚志編著、ミネルヴァ書房]では、大きく扱われている。②は、中世のローマ=カトリック圏がラテン語世界であったことを明確に理解できるというこ

とである。ギリシア語文化圏としてのギリシア正教会との対比もしやすくなる。

中世のローマ=カトリック圏の共通語がラテン語であったことは、生徒たちにとって必ずしも理解しやすいことからはではない。その原因は、教科書記述にもある。ラテン語については中世最後の文化で述べられるため、ラテン語が中世西ヨーロッパ世界形成に果たした役割を理解することは難しいのである。驚くべきことであるが、ローマ=カトリック教会でラテン語訳聖書が用いられたことを明記した世界史Bの教科書は1冊もない。『新約聖書』がギリシア語で書かれたことを述べた教科書も、聖書のラテン語訳には触れていないのである。早急な改善が必要であろう。

教科書に聖書のラテン語訳を明記するということは、神父ヒエロニムスを取り上げるということでもある。彼は5世紀初頭に新旧の聖書をラテン語に訳し、このラテン語訳（『ウルガタ』）がローマ=カトリック教会の公式聖書となったのである。ヒエロニムスはアウグスティヌスの同時代人であり、ゲルマン人大移動期の激動の時代を生きた人であった。そして、ヒエロニムスのラテン語訳聖書を400年後に校訂したのが、アルクイン（ラテン名のアルクイヌスで表記したほうがいいかも知れない）なのである。「西ヨーロッパ世界の形成」に深く関わったヒエロニムスを世界史の教科書が取り上げてこなかったことは、不思議というほかない。（ヒエロニムスについては、樺山紘一著『地中海』[岩波新書]が、伝説を含めて興味深く紹介している。）

中世の西ヨーロッパ・中央ヨーロッパは、「ラテン=キリスト教世界」であった。この観点を明確に持てば、世界史教科書に聖書のラテン語訳やヒエロニムスの記述が欠かせないことは、自然と理解されるだろう。（「ラテン語と俗語」の問題を避けて通ることはできないが、本稿では取り上げることができなかった。）

#### おわりに

2年ほど前から世界史B教科書の比較・検討を続けてきたが、単なる教科書評価ではなく、授業に直接関わる作業として行ってきた。本稿の内容も、中世ヨーロッパ史の授業展開と不可分のものである。

世界史という森は深い。とても歩きつくせない。ただ、その中を右往左往することの楽しさを、これからも生徒たちには伝えていきたいと思う。

## 特集に関連するホームページのURL

世界史の扉をあけると◆<http://d.hatena.ne.jp/whomoro/>

本稿の執筆者によるブログ。世界史教育のありかたに関する論考や授業案の紹介、書評などを豊富に掲載。

## 1. はじめに

2009年から11年にかけて、NHKは司馬遼太郎原作のスペシャルドラマ「坂の上の雲」を放映した。毎回、「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている…」という『坂の上の雲』の冒頭の文章が読み上げられる。「まことに小さな国」は、江戸時代末期の日本を指すことは明らかである。

江戸時代後期の人口は約3,000万人であり、日本は産業・文化が高度に発達した平和な国家であった。来日した多くのヨーロッパ人が日本の社会・文化と日本人を称賛している。当時のヨーロッパでは、日本を「七帝国」の一つとみなしていた。「七帝国」とはロシア帝国、神聖ローマ帝国、オスマン帝国、清国、ペルシア帝国、ムガル帝国と「日本帝国」であるという。確かに産業革命と市民革命以後の欧米諸国は、急速な発展を遂げ、「七帝国」を上回る文明国家だったかもしれないが、それでも日本は「小さな国」ではなかった(平川新『開国への道』<2008年、小学館>など)。

ペリー来航・開国以後の近現代史を学習する「日本史A」ではあるが、開国以前の事項であっても、産業や学問・思想、教育における近代の萌芽など、近代国家の形成過程を考察する上で必要な内容を扱うことになっている。日本の近代化を準備する要因が近世に形成されていたのである。明治維新を機に日本の政治・社会・経済・文化は大きく変貌を遂げるが、それ以前の、特に江戸後期の「日本帝国」を学ぶことなく、日本の近代を理解することはできないだろう。江戸時代の詳細は「日本史B」で学習することになるが、第一学習社『高等学校 日本史A 人・くらし・未来』(以下、『日本史A』)では、「せまってくる外国船」、「ちからを蓄える庶民」、「近代思想のいぶき」、「揺らぐ幕藩体制」という4つのテーマを設定し、江戸後期の日本の動向の一端を捉えさせようと工夫している。

本稿ではそのすべてについて述べる余裕はない。ここでは『日本史A』で取り上げた大坂(大坂三郷。大阪市の中心部)の「二十四組問屋」、「両替商」、「懐徳堂とみながなかと富永仲基もとやまがたげんとう・山片蟠桃やまがたばんとう」、「緒方洪庵と適塾」、「大塩平八郎と大塩の乱」のうち、「懐徳堂」と「適塾」について叙述したい。大坂の商工業については、『日本史A』教科書関連データDVD-ROM収録「地域学習の手引き 大阪府編」の近世の項を参照していただきたい。また、近世の大坂については、脇田修『近世大坂の町と人』(1986年、人文書院。2015年、吉川弘文館)や渡邊司『町人の都 大坂物語』(1993年、中公新書)など、すぐれた本が多数出ている。

## 2. 大坂の学問と教育

商工業が発展した近世の大坂は、「日本の賄い所」「諸国の台所」(「天下の台所」と呼ばれるようになるのは明治以降)といわれ、財力を持つ商工業者が多数存在した。文化・学問の発展は大坂町人の富が背景にあった。大坂の学問は、儒学・和学・洋学とも盛んになった。懐徳堂・適塾のほかにも、地域に密着した多数の私塾・郷学が開かれていた。また、大坂の寺子屋は成立時期も早く、正確な数は不明であるが、数や就学率の高さでほかの地域を上回っていたと考えられている。習字・読書のほか算術(算盤)を教える寺子屋の比率が57%(全国平均25%)になるという統計もある。大半の寺子屋は男女共学であり、男女の比率は3対2だった(全国平均は4対1)。さらに、天明期以降、石門心学が普及し、大坂商人道の確立に貢献した。江戸末期には、明誠舎・静安舎・信成舎など7つの心学舎が開設されていた。

## 3. 懐徳堂

(1)創建 1724年、大坂の富裕な5人の町人が資金を募り、彼らの師である儒学者の三宅石庵みやけせきあんを初代学主に迎えて、尼崎町一丁目(現、中央区今橋4丁目。日本生命本社のある場所)に開設した。5人の町人の一人が富永仲基ほうしゅんの父である道明寺屋吉左衛門(富永芳春)である。三宅石庵は京都出身で、朱子学や陽明学、伊藤仁斎いとうにさいの古義学などを学び、それぞれの長所を取り入れ、折衷させるという学風だった。大坂に塾を開いたが、1724年の大火ですべてを失い、平野郷(大阪市平野区)の郷学・含翠堂がんすいどう(1717年設立)に身を寄せていた。

(2)発展 石庵の門人の中井 齋庵しゅうあんの尽力により、懐徳堂は1726年に幕府官許の大坂学問所になった。諸役免除の特典が与えられたが、以後も大坂町人が学校を運営した。石庵死去の翌1731年に中井齋庵が2代学主になり、五井蘭洲ごいらんしゅうが齋庵を助けて朱子学や和学を講義した。1758年に齋庵が死去すると、石庵の子の三宅春楼しゅんろうが3代学主になった。1782年、春楼が死去すると齋庵の子の中井竹山ちくざんが4代学主になった。のち5代学主になる弟の中井履軒りげんとともに懐徳堂の全盛期を築いた。その学問は朱子学が基本だったが、陽明学や古義学にも寛容だった。しかし、江戸の徂徠学(古文辞学)は厳しく批判した。この時代、大坂町人のほか、大坂在住の武士、近郷、地方出身者が学んだ。知的交流の重要な拠点として、昌平坂学問所と並ぶ、またはそれを凌ぐ学校になった。その時代の学問の自由・平等の精神を示す言葉に、書生の寄宿舎に掲示された1758年の定書の一文がある。「書生の交りは、貴賤貧富を論ぜず、同輩となすべき事」。懐徳堂は1792年の火災で全焼したが、1796年

に再建され、1869年の閉校まで存続した。

(3)富永仲基と山片蟠桃 東洋史学者の内藤湖南は1896年、「300年間…断々たる創見発明の説を為せる者、富永仲基の出定後語、三浦梅園の三語、山片蟠桃の夢の代、三書是のみ」と記した。狩野亨吉が安藤昌益を「発見」する前のことだから安藤昌益をあげていないが、独創的な思想家3人のうち、2人が懐徳堂から出た町人学者である。

富永仲基(1715～46)は三宅石庵に儒学を学び、10代半ばにして「加上」の説を生み出し、その理論で儒教を論じた。その後仏教を研究し、「加上」の説で仏教を再構築しようとした。「加上」の説は、後世に生まれた学説は、その正当性を示すために先行する学説を超えようとして、より古い時代に自らの学説の根拠を求める、そして先行する学説に何かを加えるので複雑さが増す、というようなもので、当時としては画期的な考え方であった。彼の主著の『出定後語』は、仏教を「加上」の説で分析・解釈したものである。それ以前からあった保守的な仏教(いわゆる小乗仏教)に加上して大乘仏教が生まれ、さらに多くの学派(諸宗)が加上して生まれたと考えるもので、大乘仏教の否定と受け取られ、仏教界からは批判された。『出定後語』を理解し評価した人物として、本居宣長がいる。また平田篤胤は、仏教排撃にこの書物を利用した。「加上」説のほか、「誠の道」などが有名である。富永仲基は『出定後語』を刊行した翌年、31歳で夭逝した。

山片蟠桃(1748～1821)は富永仲基の死後、播磨国で百姓の子として生まれた。12歳の時、大坂堂島の米仲買升屋本家で丁稚奉公を始め、同時に懐徳堂に通い、中井竹山・履軒らに学んだ。1772年、支配番頭になり、1783年には仙台藩の財政危機を救った。蟠桃の尽力により、升屋は蔵元・掛屋、大名貸などにより数十の藩と関係し、大坂でも有数の豪商になった。その功績が認められ、升屋本家の親類並に取り立てられた。彼の学問の集大成が18年にわたって執筆された『夢の代』である。その内容は、天文・地理・神代・歴代・経済・無鬼など12章からなる。『日本思想大系 43』(岩波書店)に全文が掲載されているが、470頁に及ぶ大作である。彼は、多くを中井兄弟から学んだが、太陽明界説と無鬼論は独自のものと述べている。麻田剛立から天文学を学んだ蟠桃は、本木良永の『天地二球用法』や志筑忠雄の『曆象新書』の影響も受けて地動説を唱え、太陽系や大宇宙についても論じた。また、靈魂の存在を否定し、一切の迷信・邪説を排除し、仏教・神道の非合理性を批判・攻撃し、近世においては最も徹底した唯物論を唱え、合理主義的思考をおこなった。『夢の代』の跋文の最後に次の2首をあげている。「地獄なし極楽もなし我もなし ただ有るものは人と万物」「神仏化物なし世の中に奇妙ふしぎのことは猶なし」。蟠桃は近代思想の先駆者の一人であった。

#### 4. 適塾(適々齋塾)

(1)開設と発展 緒方洪庵(1810～63)は、2年間の長崎遊学を終えて大坂に戻った1838年、瓦町二丁目(現、中央区瓦町2丁目)の借家で医院を開業し、また、そこで蘭学塾を開いた。大塩の乱の翌年だった。1845年に過書町(現、中央区北浜3丁目)に町屋を購入して転居した。現存する建物である。その2階建ての建物は延床面積約417㎡、1階奥の方(中庭の南側)が洪庵と家族の住居で、1階の一部(中庭の北側)と2階が塾生の部屋・教室として使用されたようである。最盛期は、塾生一人に1畳という窮屈なものだったらしい。2階の塾生大部屋の柱には無数の刀痕が残っている。1862年、幕府奥医師・西洋医学所頭取になって江戸に下るまで、洪庵は適塾での教育を続けた。

(2)塾生 全国各地から優秀な青年が集まった。「姓名録」(入門者の署名帳)では636人であるが、実際にはその数倍の者が学んだようである。自学自習の実力主義に基づき、各自の努力で実力を養った。塾生の中から、幕末・明治維新期に日本の近代化に貢献し、世界にはばたく人材が輩出した。大村益次郎、佐野常民、杉亨二、箕作秋坪、橋本左内、大鳥圭介、長与専斎、福沢諭吉、花房義質、高松凌雲らは特に有名である。手塚治虫の曾祖父の手塚良仙も塾生で、福沢諭吉と交流があった。

#### 5. おわりに

懐徳堂は1869年に閉鎖されたが、1913年に懐徳堂記念会が設立された。1916年に重建懐徳堂が開設され、講義や講演がおこなわれるようになった。しかし1945年に戦災で書庫以外の建物は焼失した。1949年、記念会の蔵書・職員が大阪大学に移管され、蔵書は懐徳堂文庫として保存されることになった。1999年、文学部内に懐徳堂センター(現、懐徳堂研究センター)が設置された。記念会は会誌『懐徳』を、研究センターは『懐徳堂研究』を刊行している。また、大阪府は1982年、国際文化賞として「山片蟠桃賞」を設けた。第1回はドナルド・キーンが受賞している。

適塾では明治10年代まで医業と教育がおこなわれていたようである。1941年に国史跡に指定され、翌年、大阪帝国大学に寄付された。1952年、適塾記念会が設立され、1980年に解体修理工事の終了後、一般公開が始められた。記念会は会誌『適塾』を発行している。2011年、大阪大学適塾記念センターが設立された。このように懐徳堂と適塾は、その精神や書籍・建物が大阪大学に継承されている。

【参考文献】 平川新『開国への道』(小学館)、『新修大阪市史』3・4(大阪市)、脇田修・岸田知子『懐徳堂とその人びと』(大阪大学出版会)、宮川康子『自由学問都市大坂』(講談社)、梅溪昇『緒方洪庵と適塾』(大阪大学出版会)、『大坂学問史の周辺』(思文閣出版)、『日本の名著』18・23(中央公論社)など。

## ●はじめに

フランスの高校で地歴の教科書を執筆する先生方を日本に招聘し、日本についての記述を充実させること、そして相互理解を深めるため、笹川日仏財団の援助のもと、日仏地歴教師交流事業が平成5(1993)年より実施されてきた。2014年はこの事業の10回目の年にあたる節目の年であることから、今度は逆に日本の教師をフランスに派遣しようということになった。幸運にもそのメンバーとなり、今春、ナンシーとロモランタン(オルレアンの南約50km)の高校(リセ)を見学するとともに、日本を紹介する授業を英語で行ってきた。本稿ではその模様を報告する。

## ●パリからナンシーまで

パリは新聞社襲撃テロ発生後ということもあり、有名観光地やターミナル駅には迷彩服を身にまとった三人組の兵士が自動小銃をもって警備に当たっていたが、それ以外の場所では、特にピリピリとした雰囲気はなかった。しかし約20年ぶりのパリは、随分とアフリカ系労働者が増えたなどという印象をもった。

パリから地方の高校まではTGVを利用したが、パリを出てももの10分もしないうちに十勝平野のような景色が現れたのには驚いた。これまでのプログラムで日本に来たフランスの先生方が、東海道新幹線で移動する時に切れ目なく続く人家にとっても驚くのであるが、フランスの景色を見て、彼らが驚くのも当然なのだとな納得した。また、TGVの高速新線が人家の少ないところを選んで敷設されたということもあるが、途中大きな街を見ることはなかった。なるほどこのような環境を走るのであれば、TGVは新幹線ほど騒音や振動にナーバスにならなくても良いのだとな納得できた。

ナンシーといえば、かつての地名・物産暗記の地理の時代に受験生だった者としては、メッスとともにアルザス・ロレーヌ地方の鉄鉱石の名産地として記憶している場所だ。この街は第二次世界大戦時にドイツ軍の空襲を受けていないため、古い街並みが残っていた。建物の一階には商店が入っているが、到着した日は日曜日なのでお休みであった。日曜日を稼ぎ時と捉える日本の感覚からは違和感のある光景ではあるが、信仰や労働者保護という観点からは日曜日に休むというのは本来正しい姿なのかもしれない。

## ●リセ・スタニスラスにて

ナンシーでは、2013年に私の勤務校でフランス地誌の授業を参観したStéphane DOUILLOT(ステファヌ・ドゥイヨ)先生が勤務しているLycée Stanislas(リセ・スタニスラス)に向かった。ドゥイヨ先生はリセの背景の丘を指差し、「あれがケスタ」だと教えてくれたが、指摘されなければスカイラインが一定のただの丘である。家が建て込み

見通しが利かないこともあり、地上からではケスタ地形を実感することは難しかった。

「リセ」とは日本で言えば高等学校に相当するが、見学すると高校と専門学校、そして理科の実験設備の充実度は高専のようであった。



## ▲リセ・スタニスラスの実験室

学校に着くとまず調理コースの生徒によるコーヒーのサービスがあり、そこで一服してから会議室で学校長よりプレゼンテーションソフトを使った学校の説明があった。教員130名、生徒数は1,159名、そのうち194名は遠隔地の生徒であるため、寮で月曜日から金曜日まで生活しているとのことであった。また、この学校は地域の拠点校であるため、移民向けのフランス語教育も行っているということであった。

お昼になるとレストランと見間違ふほどの立派な校内の食堂で、我々一行を歓迎する昼食会が開催された。なんとこの時供された全ての料理は調理コースの生徒たちによって調理されたもので、それをサービスするのも生徒たちであった。つまりこの校内のレストランは調理コースの生徒たちの実地訓練の場となっていたのである。日本にもテレビドラマでも取り上げられた「高校生レストラン」があり、このようなレストラン自体には驚かなかったが、昼食時にワインが供されたことにはとても驚いた。下の写真のお二人は校長

(右)・副校長(左)であるが、しっかり飲んでおられた。

日本では勤務時間中の飲酒はご法度



## ▲生徒たちによる食事のサービス

だが、と尋ねると、副校長は「ここはフランスよ。毎日飲んでいるわけではないし、たしなむ程度なんだから問題無いわよ。」とのことであった。私がワインをどうしたのかについてはここに明記しないが、授業の前に「貴重な体験」をしたとだけ記しておこう。

さて授業の内容は、北海道から沖縄、都市から地方まで日本各地の様々な暮らしを紹介し、何を知ればその国を理解したことになるのだろうかという疑問を投げかけてから、日本人の一人である東京の高校に勤めるムッシュ・シバタの一日を簡単な英語で紹介した。



▲筆者による日本紹介の授業

その後は通訳を介して質疑応答を行ったが、その内容は時事的なものや抽象的なものが多かった。「日本は中国の追い上げを受けているが、これからどのような産業を発展させていくべきだと考えているか?」「フクシマ事故後の日本の原子力政策はどうなっているのか?」「21世紀の日本の宗教状況はどうなると思うか?」と、極めて高度な質問が多かった。そうかと思えば「マンガは人気ですか?」という質問や、フランスでは北野武監督の映画が有名ということもあってか「ヤクザはどのくらいいるのですか?」という質問もあった。またこちらから『フランス人は10着しか服を持たない』という本があるんだけど?と水を向けると、すかさず「ノン!」という反応があった。

真剣に質問する生徒は主に前の方に座り、後ろの方で固まって座っている生徒たちは時としておしゃべりをし、先生方から「静かに!」と注意されたりするところは、どこの国の高校生も同じなんだな、と微笑ましく思った。

### ●リセ・クロード・ドゥ・フランス・ドゥ・ロモランタンにて

授業の後はまたTGVでパリに戻り、翌日はオルレアンのある小さな町ロモランタンに向かった。ここでは2011年の秋に日本を訪問したEric MAGNE(エリック・マーニュ)先生のLycée Claude de France de Romorantin(リセ・クロード・ドゥ・フランス・ドゥ・ロモランタン)を訪問した。

到着すると学生向けの食堂横にある小部屋で歓迎の昼食会が催され、この学校でも「貴重な体験」をさせてもらった。そして午後に行方した小池有紀先生(都立淵江高校)

が相互の文化のステレオタイプを扱った授業を行い、生徒たちと大いに盛り上がった。

翌日はマーニュ先生の普段の地理の授業を参観させてもらった。この時間は日本を自然災害のリスクという側面から考えさせるものであった。YouTubeで津波の映像を見せてから、沿岸地域に暮らすことのリスクを考えさせていた。ご存知のようにフランスは原発発電比率が高い国であり、福島第一原発の事故への関心が高いようで、原発の位置が地図上に示され、その立地のリスク等を考えさせていた。また、フランスに比べて沿岸部の人口密度が極めて高いことに伴うリスクは何かといった問いもなされていた。



▲マーニュ先生の地理の授業

日本については、自然災害のリスクという面だけを取り上げているわけではなく、地理的ダイナミズムという項目の中でも扱っているということであった。しかし、かつては日本をメガロポリスの例として、そして世界の三極の1つとして扱っていたが、後者については近年アジアの中の日本という扱いになり、中国の台頭に焦点が置かれつつあるとのことであった。マーニュ先生によれば、今の日本の経済状況は東欧諸国との競争にさらされているフランスと同じであり、この経済競争に勝つ方法を考えさせることも目的としているとのことであった。そこで私は生徒たちに、「日本はこれからどのような産業を振興させていけばよいと思うか?」と聞いたところ、「ナノテクノロジー」という答えが返ってきた。「ではフランスは?」と聞くと「ラグジュアリー産業」という言葉が返ってきた。それに対して私は「フランスは世界で最も観光客を受け入れている国である。観光産業こそフランス経済の柱にならないか?」と返したが、生徒たちの反応は、ここがロモランタンというパリから離れた交通の不便な地方で外国人観光客の少ない地域だからか、はたまた自国の観光資源の魅力を意識していないためか、いまひとつであった。

マーニュ先生は、「物事を教え込むことより私たちが大事にすべきことは授業で種を蒔くことだ。そしてその発芽率をどう高めていくかが課題だ。」と話されていた。まったく同感である。国は違えども、同じ志を持つ教師と出会えたことは、なんともうれしいものであった。